
砂倉居学園

猫々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂倉居学園

【著者名】

猫々

【あらすじ】

厳肅なムードが漂い、窓からは海の絶景が見られる…私立砂倉居学園。

日本でも五本の指に入るだらつといわれる砂倉居財閥の建てた学園である。

全寮制、私服登校で、幼学部、小学部、中学部、中学部、高等部の四つの学部から成り立っている。

この学園では、世間でいう『お金持ち』の子息達のための教育の場である、といえる。

九月、その高学部にひと組の双子が転入してきた。
かおるとみちる、そして関わる人々の学園生活。

『想巡庵』に記載されている『砂倉居学園』の転載となります。

1、9月2日～8：45から

厳粛なムードが漂い、窓からは海の絶景が見られる…私立砂倉居学園。

日本でも五本の指に入るだらうといわれる砂倉居財閥の建てた学園である。

ここは全寮制、私服登校。

幼学部、小学部、中学部、高等部の四つの『学部』から成り立つてこる。

この学園では、世間でいう『お金持ち』の子息達のための教育の場である、といえる。

「ここがな？」

くづくづとした瞳で愛嬌のある顔をしている。

瞳も髪も深いこげちゃ色で、軽くウエーブのかかった髪をかきあげた。格好は白いシャツにジーパンといういたつてシンプルな格好だ。

シンプルな格好だからこそ、スラリとした長い足が際立つ。
だが…男？いや、女だらうか？性別は、わからない。

「みちる、この辺で学校といえば、ここだけだらう？」

そう応じたのは、「みちる」と呼ばれた者とは対照的な、すっと切れ長の皿と真っ直ぐな髪質で、それぞれ炭のようく黒い髪と瞳の存在。

こちらは深緑色の面白いデザインのTシャツに、中国を連想させそうなズボンをはいてる。だが、この者も性別が判断できない。

「この辺といつか…」

黒きつつ、黒髪の存在

かおるは、振り返った。

「正確には…」

「どこまでも続く海原を見る。
潮風が一人の髪を揺らした。

「この『島』にはこの学園しかない」

砂倉居学園は…一県から船にゆられて十分の『島』だった。

「ねえ、ちょっと見てみなよ…」

「きやつ、転校生？」

「ちょっと、イイ感じじゃない？ あの男の子たち」

「えー。違うよー。女の子たちだよー」

「どっちにしても美人ねえ」

高等部の女生徒が窓辺に集まり、外にいる一人組みにそれぞれの評価を付ける。

「…あれいですわね…」

「ぼつり、と声が聞こえた。

「か、夏鈴さん？」

夏鈴と呼ばれた少女はくすくすと笑う。

大きな瞳、少し上向きの鼻。髪にはピンク色のレースがひらひらと髪に巻き付いている。

そして彼女の最も特徴的なのは、その格好。ベビーピンクのヒラヒラ、フリフリのワンピースを着ている。ピンクハウスのドレスのようだ。

「…あの一人、欲しいですわ

「えつ？？？？」

夏鈴の言葉にそう動じている少女のことを『付いているのかいな』いのか。夏鈴はそのまま、ぼそりと続けた。

「絶対に私のものにしてみせるわ…。とくに…」

「うつとうつと少年（と夏鈴は仮定している）を見つめる。

「あの人…黒髪の方…」

「転校生を紹介します」

めがねをかけた小太りの担任。にこにこにこにこ笑つていて。
(なんであんなににこにこしているんだ?)

こげちゃの少女（と夏鈴は仮定した） みちるは疑問に思い、
軽く首を傾げる。

その様は小鳥のよう^に愛らしい…。夏鈴はうつとりした。
(同じクラスなんて…!…!… これは運命ですね! 一人とも手にはいるなんて…!…!…)

夏鈴はこんな時だけ神に感謝する。神様、一人を私にくださつて
ありがとうござります…と。

しかし神がいたら『夏鈴のものではない』と、お告げをしたほうが
がよいと思うが。

「^{あそ}麻生みちるさん、麻生かおるさん。お一人は兄弟です。みなさん
つ、仲良くしてくださいね」

ふおふおふおとい^う笑^ういが似合^ういそ^うな担任のあだ名は『おたふ
く』だつた。

それはさておき、担任からの紹介が一通り終わると一人は一言ず
つ挨拶をする。

「麻生みちるです。みなさん、よろしくね!」

焦げ茶の髪にくりくりとした瞳のみちるは元氣いっぴ+ハート
マークのつきそ^うな明るい声で言つた。
しかし…。

「…麻生かあるです」

もう一方の転校生、かおるはそ^う言つて頭を下げただけだった。

夏鈴は「あそ^うみちる、あそ^うかある」と何度も口ににする。
(一人ともけつこ^う、普通の名前ですわね)

『「この時間が終わつたら早速…』と、夏鈴はまた笑みを浮かべた。端から見ればなかなか不気味な笑みである。

一時限目のホームルームが終わると、転校生達の周りに人だかりができた。

口々に、質問が飛び交う。

「どこからきたの？」

「京都から」

みちるが、にっこりと微笑みながら答える。

「どんな字で名前を書くの？」

「ないしょ」

先程から質問に答えていたのは、にっこりと笑うみちるだけである。

かおるは、その質問の輪に入ろうともしない。

最初、かおるの周りに、あつた人ばかりも、今では、みちるちるの方に移ってしまった。

（チャンスですわ）

夏鈴が、みちるの人ばかりから離れ、悠然とかおるのもとへ移動する。

「はじめまして。私、わたくし ささむと かりん 笹本夏鈴と申します。よろしくお願ひします

わ

にっこりと微笑む夏鈴に、かおるは、軽く顔を見て、

「麻生かおるです…」

そして、また窓の外を見る。

（なんですか、このかおるとやらは）

今まで、そんな扱いを受けた経験のない夏鈴は、ムッとした。

「どんな字で名前を書きますの？」

「…自分で考えてみてはいかがでしょ」つか？

丁寧に、受け答えはされたが、…馬鹿にされている、と思つた。

「かおる…」

みちるの呼びかけに、夏鈴は「」の後『そんな言い方ないじゃないか…』とか、勝手に続く言葉を想像した。

『みちるちゃんはなんていい子なんでしょう…』と感動しつつみちるを見たが、次に続いた言葉は。

「次は古典で、前の学校と教科書が違つて。もういに行ひ」
そんな、予定（といつ名の予想、妄想）と全く違い、夏鈴はガクリとなる。

勝手に期待した夏鈴が悪いのだが、『私の立場は？…』なんて思つた。

みちるの言葉にかおるは、「ああ」と立ち上がり、みちるは、「ごめんね」と軽く頭を下げるから、夏鈴のもとを去つた。
（…「んな屈辱は初めてですか…」）

しばらく後姿を見送つていた夏鈴だが、
（…まだ、彼が恋心というものを知らぬだけ…）

夏鈴はそう、解釈した。

ネバーギブアップの精神。

別名：勘違い。先走り解釈。妄想の暴走。

「恋は障害があるほど燃えるものですわ！…」

ぐつと握りこぶしを作りながら叫ぶ（？）夏鈴の姿は、なかなか見物であった。

「かおるう」

「…なんだ？ みちる、情けない声を出すな」

職員室から教室に戻る途中。廊下には窓がいくつもならび、さんさんと太陽のひざしが差し込んで、とても明るい。九月に入つたといえども、まだまだ夏の陽気だ。

「もしかして、いまだに夏バテが治つてないのか？」

「ちつがーうつ…！」

力一杯に手を握り、みちるはかおるを見み付ける。

「何のためにここに来たんだよ。光兄さんを……」

「……パンチ。」

みちるの言葉に、かおるは教科書を床に落とした。

「か、かおる……？」

「……言つない」

耳に手を当てながら、呻う。……半ば、叫びに近い。「まだ……まだ言わないでくれ……」

かおるはそう言つた。語尾は、震えている。そして最後に「頼む」と続けた。

それを聞いたみちるは細く息を吐き出した。

（まだ……だめか……）

（もう思つた。

（光兄さん、早く戻ってきてください）

みちるは、祈りにも似た思いを抱く。

かおるが、誰よりもかおるが貴方のことを持つています とも。

みちるは頭を振つて、かおるに小さく「「いみん」と謝罪する。顔を上げたかおるに、続けた。

「ところでかかる、ボク思つたんだけどさあ。やつきの態度はちよつといただけなかつたんじやないかなあ……？」

そんな言葉を聞いて数度瞬くと、かおるは耳から手を離し、じつとみちるのことを見つめた。しばらくして、落とした教科書を拾つ。二、三度、呼吸を繰り返した。

「……なにがだ？」

「だーかーらー」

ふ一つと深いため息をつくみちる。

「さっきの、女の子に対する態度だよ。前の学校にいたときはも

「うちゅうと…いや、もつと愛想が良かつたじゃないか」

「学校には勉強に来ているのであって、愛想を売りに来てるんじゃない」

かおるはみちる回様、長い足をむわむわと前に進めながら言へ。

「…愛想を売りに来たわけじゃないにしろ、馬鹿にする」とはないじやないか」

「馬鹿にしてたのか?」

「誰が? とでも言いたげな瞳をむかしらに投げかけてくるかおる。天然ボケなのだろうか?」

みちるがじつとかおる見つめていると「観念した」といつた具合に教科書を持つていなの方の手を軽く上げながら吹き出す。

「…そ、そんなにじつと見るなよ」

別に馬鹿にはしてないぞ? と言いながら 微かに、笑つた。
「くつ…分かつた、分かつた。愛想をふり撒かなくても、邪険にしない…ようにするよ。で、でも、本当にいるんだな。ああいう娘…。ふふ」

「…かおる、地が出てるわ」

若干ジト目になりつつ、低い声でみちるはほやく。

その言葉を聞いた途端にかおるは笑うのをやめ、「…出でていたか?」と、先ほどまで笑っていた態度とは一転、そう、クールに切り替えた。

「おう、ぱりぱりに出ていたぞ」

「…人のこと言えんぞ、みちる」

淡々と言う姿は、先程の「質問の輪に入らうとしない」かおるの姿だった。

「お前は女らしく過ぐるのだらう? 女がそんな言葉使いをするなよ」

「女らしく過ぐすなんて言ひてなごや…言ひてないよ
そう言いながら伸びをする。「うーっ」と声が漏れる。

「ただ、性別の分からぬ謎の兄弟をやるの」協力してくるだけだ
よ…優しい弟としてはね、か・お・る」

ハーマークが思いつきついでいた言葉である。

しばらぐみちるを見ていたかあるだつたが一度足元を見て、顔を
上げた。

瞳はどこか、遠くを見つめる。

「男を演じていた方が、色々と気がまきれて、いいんだ。…私と
しては」

忙しくて、氣を使つて…毎日深い眠りにつければ、

…余計な夢など見ず、元眠ることができるぜ。

「……」

静かなかおるの葉にみちるはじつと、その姿を見つめた。

じばらぐじて、氣がつく。一時限目の始まりのベル音が鳴
つていることに。それから…

「…みちる

「ん?」

呼びかけに、じつと見ていたみちるはハッとした。

ハッとしたみちるの様子に気付いているのか、いないのか、か

おるはふと周りを見渡して、続けた。

「…じばらぐ、どうだ?」

行きはよいよい、帰りは…とかいうやつである。

行きの時には先生がいた…もとい、連れていつてくれた。

帰りには先生がいない…当たり前といえば当たり前なことだが。

性別不明…に見せかけている…男女の双子、みちるとかあるは、仲良く方向音痴なのであった。

2、9月2日／10：00から

五条グループ…。

もとをたどれば平安時代から続く家系だとか。戦前一度没落した
が今から三代ほど前に立て直した。由緒ある家柄と言えるだひつ。
しかしその五条家、肝心な世継ぎがない…とされている。

リリリリリリリリリリリリリリ

けたたましく授業の始まりのベル音が鳴り響く。

しかし今日来たばかりの転校生がやつて来ない。

（まだ、いらっしゃらないのかしら？）

夏鈴は後ろを何度も何度も振り返る。…まだ来ない。

2時間目は古典の時間だ。

この古典の先生というのが小河美千代氏といって、美少年がとても好きというあたり、夏鈴と趣味が似ている。

似ているからこそなのかもしれないが、夏鈴はこの小河氏が苦手…はっきりと言つてしまつと嫌いだつた。

いつも…夏鈴が目をつけた美少年の約5分の3程度は小河氏と趣味が被り、美少年争いで小河氏と対決（といつても影ながら火花を散らすだけだが）をし、現状、ほとんど負けている。

相手がどんな手を使つているか知らないが今回は負けたくない：負けられない、かある（とみちる）を守つて（？）みせると、妙に時間には厳しい小河氏を見たときに誓つた。

しかし、先程から何度も何度も後ろに振り返つてゐるせいか、

「 笹本さん」

と、現代文に直すことを指名された。

その時に後ろからがらがらと音をたててかかる、みちるは教室に入室した。

「…遅くなりましたー…」

一度小河氏の顔を見てから深々と礼をしたみづる。

「すみません」

軽く頭を下げただけのかおる。

だが、小河氏の心は決まっていた。

(んつふつふつふつふつ。あの子、ゲットするわ)

小河氏の視線の先にはまぎれもなく、かおるが立っていた。

「まあ、席についてください」

はいっ！ と元気よくみづる、はい、と直つてさつと席につくかおる。

(んーっ、新しいタイプね。あのクールさがまた良いわー？)

「…………」

夏鈴は危機感を覚える。

(あの目はやばいですわ、狙われたのは、もつ確実ですわー…っ…)

…夏鈴は軽くくらりときた。

「あっ、笛本さん、座つて」

にっこりと小河氏は微笑む。心中では夏鈴のことなど忘れていたが、教師の本能が忘れていなかつた…といつことにしておこう。「えーっと、麻生かおるさん、みづるさんですね？ わたしは小河美千代です」

よろしく、と小さく付け足す。

「えー、わたしの場合、遅刻をすると宿題をだしますので、そのつもりで。今日は、お話をしたいので、文系研究室に18時頃に来てください」

「わかりました」

二人は同時に答える。まるで、ハーモニーのようだ、と夏鈴は思い、小河氏はかおるの澄んだ声にただただうつとりと耳を傾けてい

た。

しばしの、間。

はつとしたように小河氏は生徒達の方を見つめる。

「えー。じゃあ、教科書42ページを開いて…」

ちやくちやくと時は過ぎていった。1时限50分。7时限ある。朝食、昼食…もちろん夕食と…食事は食堂で食べるのだが、席はどこに座るかなどの決まりはないのでかおる、みちるの側で食べようと思の争奪戦があつた…らしい。

結局、とあるテーブルの隅にみちる、その隣にかおる、かおるの隣に夏鈴…と座つた。

18時は夕食の1時間前で、文系研究室は教室から食堂までの間にあるといふことで立ち寄つた。

2時間目に間に合わなかつた…といふ教訓を生かし、今度はきちんと（？）案内人をつけた。

こんこん

文系研究室のドアを軽くノックする。…返答がない。

「失礼しまーす」

そろそろとドアを開けつつみちるが言つ。

「…いしないな」

誰もいない。まだ日が長いのでこの部屋が真つ赤に染まつっていた。

「きれい…」

みちるが感動の声を漏らす。

「私は、好かんな。血のよつで…胸がムカムカする」

淡々とした声。

滲むのは、痛み。

『…それは光兄さんを連想させるからか…？みちるは、その言葉をのみこんだ。

「それにしても本当にじつしたんだろうね…。それからじつしたらいいんだろ？」

話があるつて言つたよねー？とみちるは続ける。

「小河先生の机でも探してみるか？何かメモとかあるかもしけないし」

「ん、そだね」

みちるは北の方の机から見ていく。うーんないな…などと独り言を言いながら。

かおるは南の方の机から調べていく。すぐにみつかった。

「小河美千代…みちるあつたぞ」

軽く手招きをする。

「何かメモあるー？」

そう言いながら小走りのみちるがこけた。

「「ふつ」

「「えつ？」」

今、確かにかおる以外の声がした。だから思わず「えつ？」とかおるとみちるがハモつたのだ。

かおるは皿をつり上げる。

「誰だつ」

みちるを守るようにみちるの前にでた。…だが、みちるもまたかおるを守るために立ち上がり、かおるに背を会わせ、周りを見渡している。

…と、その時に入り口から声がきこえた。かおるが大きく振り返る。

「わ・た・し。小河よっ」

からからと入り口から入つてくる小河氏。顔がにやけている。

「そんな怖い顔しなくてもいいじゃない…ふつ」

小河氏、思い出し笑いである。それを見てみちるはかつと顔が赤くなる。

「せ、せんせいー…」

「な、なあに?」

声が震えていたみちる。

（まさか笑いすぎたかしら？！泣いてる？！）

焦つた小河氏に対し、顔を赤くしながらみちるが言った。

「そんなに笑わなくとも良いと思う…」

（よかつた…泣いてたわけじゃないのね。…では）

ほつとして内心息を吐き、小河氏はにつと微笑む。

（作戦実行！…）

小河氏はいつもこの技で短期に男の子達をゲットしてきた。小河氏の技は短期集中…速攻で仕掛けるのが戦略であった。かあるにもいつもの技を使おうとしている。いつもと少し違うのは、その作戦に手紙を使うといふことだった。

「あ、遅くてごめんね」

小河氏は自分の隣の先生方の椅子をそれぞれ提供する。

「少し授業の説明をするわね…」

そう言つて授業の説明をする。

説明しながら口頭鍛えた（？ー）タイミングでかあるに視線を投げかけたりした。

（ふふ…。完璧）

小河氏は内心ニヤリとしつつ、時計を見上げて言った。

「あら、もうこんな時間。長くてごめんなさいね…」

髪の毛を軽く後ろによせる。

「はー、これは問題集よ。今日は遅刻してきた罰として23ページ

から25ページまでやつてくださいね？」

につこりと微笑みながら問題集を2人に手渡した。

「はい。わかりました」

「失礼しました」

二人はそれに挨拶をしながら出て行く。

小河氏は「じぐりうつせみ」などといいながらにつこりと微笑んでこちらを見ていた。

しばらくはただただ食堂に向かつて歩いて歩いていた一人だが、みちるが突然「ふつ」と吹き出した。

「どうした？ みちる？」

いきなり吹き出して…と続ける。

「か、かある気がついてなかつたのか？」

「…？」

かあるはしばらくその言葉の意味を考えていたがしばらくして「何に？」と、本当に不思議そうな顔をしてみちるの瞳を覗き込む。

「そ、そつか…」

まだ笑っているのか、肩がふるえている。

「かある、こういうこと対しては本当に鈍感だもんな」心底楽しげに微笑む。今は完全な『男』の顔だつた。

「…？」

さつぱりわからないかあるは、視線を天井へと向ける。みちるはにつこりと微笑みながら、かあるの前に立つ。

「かある、あの教師のお気に入りになつたらしいぞ」

ニヤニヤと笑うみちるにかあるは数度瞬いて「え？」と言つた。お気に入り、といつことは つまり。

「と、いうことは…」

かあるはほんの少し、笑つた。

「私を男だと思つたつてことだよな」

「まあ、やうと言えるだうね」

みちるは腕を組んで頷いた。チラリと視線をかおるの手元　問題集へと向ける。

「あと、ボクの勘では……」

そしてひょいと、かおるの問題集を取つた。

「この問題集の間にでも手紙かなんかが挟まってるんじゃないかな」「やう言いつつ、ぱりぱりと問題集をめくる。じばりくする」とこやりと笑う。

…生まれたときから一緒にいるせいが、二人はよく似たような笑い方をした。

「あつたりー」

ひらりと手に取る。白いシンプルな封筒だ。小さくすずらんが描いてある。

「読んでもいい?」

「さすがにそこまでは…な?」

一応、私宛だらうから…。やう言いつつやうやく開ける。

『麻生かおる君へ

今夜お話ししたい」とがります。10時に私の部屋へ来てください。

小河美千代より

追伸 ほかの方にはばれなつよいに来てください。電気は消しておきます。

302号室です。』

「……」

かおるは軽く頭を左右する。

「そんなに激しいの?」

みちるが見ていい? と、問いつこよと答へつ手紙を渡す。

かおるはおでこに手を当たた。

「ふーん…。ねえ、かおる。これ行くの？」

「わ…どうしようか…」

言ごながらかおるはこめかみをほつほつと搔く。

「…ねえ、かおる…」

そんな様子を見て、みちるが少し甘えるような声を出した。

（何か考てるな…）

ふう…。かおるは軽くため息をついてからみちるの方を向いた。

「なんだ？ みちる…」

みちるはぱあっと笑顔になった。

これだけ見てれば可愛い弟なのにな…。などと想つかおる。次の言葉はかなりの予想外だった。

「これ、ボク行つてみちやだめかなあ？」

1、2、3。

たつふり間が空く。

「…み、みちるが行く？！」

少々どもるかおる。なんでお前が？！ セツニティみちるの襟首をしつかとつかみ、ぐらぐらと揺らした。

先ほどのクールさはビックやら状態である。

みちるは「田が…。田が回る…」と、かおるに「やめてくれ」と助けを求めてみたが、まだゆらゆらと揺りす。

「せめて意見を言わせてくれー」

みちるの言葉を聞いたかおるは、

「…一応言ってみる」

わ、すわった田で言つた。

「んー、あのさあ。この文面からしてかおるを狙つてる…すなわち襲つちゃう事考てる文面でしょ？ だからボクがかおるの身を守るつと…」

「…私だつて護身術を習つてたんだから、女人ならぶつ飛ばせるぞ？」

女人をぶつとばす。

言つていることが何気に過激で危険だ。

夏鈴を相手に、あれほど冷めた態度を取つていたのと同一人物とは思えない。

ぐちぐちぐちとかおるはみちるに文句をつける。

そのときみちるは両手をグーにした手を、口に当て泣きそうな田（いつもより潤んでいる）でかおるを見つめ、言つた。

「かおる…！ じつしてボクの手を必要としてくれないの？！ ボクが信用出来ない？！」

そう言つたみちるに、かおるは一言。

「出来ない！」

きつぱりはつきりと言つた…。

こゝは日本。決して南極ではない。しかし今流れている空気は南极を思わせる。

「前科ありなのはどいつだ？ ん？」

続いた言葉に、みちるはかかるの口をガバリと押さえ込んだ。

「と、とつあえず」飯食べに行こつ… で、部屋に行つてからまた続きを話そうよ

ね？ とみちるは言つて、かおるをずるずると食堂に引っ張つていつた。

3、9月2日／過去を振り返る

みちるは、かなり女好きである…。（かおる談）

「す、好きです、みちる先輩…！」

顔を真っ赤にしながら思いをぶつける少女。中学2年のバッジをつけている。

「…へ？」

これを聞いたみちるは驚いた。

なぜならこのは通学中の（正確に言つて下校中の）電車の中だったからだ。

「あれ、君…バスケ部のマネージャーの…」

みちるの双子の姉、かおるはバスケ部だ。それで、顔を知つてい

た。
「佐々木暖菜です。と、突然ですみません…」

言いながら少女…暖菜はますます顔が赤くなる。みちるの記憶だとこんな大胆なことをするような娘ではなかつた気がしたが…。

「嬉しいんだけど…ごめん、僕…」

みちるはそこで言葉を区切つた。

暖菜は瞬いて、くしゅっと顔を崩す。

暖菜はひとつ、大きく息を吐き出す。

「す、好きな方がいてもいいんです」

それは、想定した答えだつたらしかつた。

「え？」

そんな暖菜の答えが、みちるにとっては予定外の言葉だつた。

「明日、引っ越しです。それで」

あなたへの想いを伝えたかつたんです…。

そう続けると唇を噛んで、顔を緊張させた。

「我が儘だつて、分かつてます。でも…。今日これから少しだけつ
わ合つていただけませんか?」

やう言つて、 暖菜は下を向いた。

みちるは数度瞬いて、それから「ううう」と笑つた。

「いいよ」

駅ビルを散策して、お茶をして。

とても簡単な けれど暖菜にとつては夢のよつな デートを

した。

「 もうそろそろ帰りつか?」

みちるの言葉に暖菜はひとつ、息を吐き出した。

「はい…。本当にありがとうございました」

夢の終わり。 夢のような時間の、終わり。

美しい夕日が山の合間にすり抜けてゆく…。

「 暖菜ちゃん」

呼ばれて、 暖菜はみちるへと振り返つた。

みちるの顔が、夕日と同じ色をしていた。
そんな瞬間…。

かおるは部活が終わると欲しい本を買いに町中にでた。

山間に夕日が沈んでいく。

(今日も一日終わつた)

かおるはそう思つた。

美しい夕日と、赤く染まる空をぼんやりと見上げていたかおるだ
つたが『本も買つたし今日は帰る』と振り返つて その、瞬間。

ロマンチックな気分が吹っ飛んだ。
キスをしているカツプル…。

かおるの視力は左右ともに1・5。

(みちると暖菜ちゃん? !)

…その後みちるはかおるに張り手をくらつた。

『可愛い後輩になにをするーつーーー』…と。

しかし、暖菜は『特別』な思い出が出来て、満足だつたらしい。

「まさか…みちる? 忘れた、なんて言わないよな…?」

食事も終わり、2人は寮に行つた。201号室だ。

かおるはみちるの首を今にも絞めそつた勢いでみちるを睨み付けている。

「あ、あれはあ、女の子の方から『キスしてください』つてきたんだよー」

(…つて、解釈しただけだけど)

みちるは心の中で付け加えた。

暖菜は『一日付き合つてくれ』とは言つたが一言も、キスしてくださいは言つてない。

「女の子に対しても理矢理になんてやらないし…ボク、好きな子に嫌われたくないし…」

「 本當だな?」

じーっとみちるの目を見るかおる。

「うん。小河先生には…ちゃんとお断りして、かおるにひゅつかい出すな、みたいなこと言つとくから」

みちるは一呼吸いれてからもう一言付け足す。

「…と…。光兄さん以外の人には」

ビクリッ。一気にかかるの瞳の力が、緩む。

「かおるを触れさせない」

今度はみちるがかおるを見つめる番だ。

ベッドに座るかおる。こめかみを軽く押さえている。

「大丈夫。悪さんてしないよ」

…多分。心の中だけでみちるは続けた。

臨機応変、つて言葉があるじゃない？ と。

「ん…。分かった…。じゃあ頼むわ…」

かおるの言葉に『まーかせて?』と言つてブイサインをする。

みちるに彼女をとられた みちるのせいで彼女にふられた
男、両手以上。

そして一日の恋のお相手もまた、両手以上…。

かおるは詳しくはわかっていないが…かおるが知っている以上に、
みちるはかなりの女好き 遊び人である。

小河美千代氏危ない！！ かもしけない。

「ほんじゃあ、オヤス!!。よこ夢を」
「寝られるわけないだろ？。お前が帰つてくるまで待つてる。ち
つとかた、つけてこい」

みちるは向とも言えぬ表情をし、その後こつこつと笑つた。

「……じゃあ早く帰るよう、努力する」

「で、出すなよ？」

に一つこつと微笑むかある。

（あら、ばれてる？）

「はーい」

みちるは胸の辺りに手を上げて、言った。

（努力します）

…心の中だけでそつまつと、みちるはそーっとドアを開け、小走
りで302号室に向かつた。

しかし。みちるに早速アクシデントが発生した。

小河氏の部屋に向かつ途中、見回りの警備員に遭遇してしまった
のだ。

「どうしたのですか？」

顔は『ガキはとつとと部屋に戻りやがれ』と書いてある。…言葉
使いは丁寧だが。

みちるは国語が苦手だ。文章を作るのもかなりの時間がかかる。

（ど、どうじよつ…）

「え、えつと…」

声が緊張でかすれる。何と言おう？

思考停止までの秒読み開始。5、4、3…

「あら、みちるさん！」

夜の廊下に少し高い声が響く。みちるには天使が見えた。だがその正体は…。

笹本夏鈴、その人である。

ピンクハウスの服といつ」とは変わりなかつたが、今は白い服だつた。

ちなみに昼間は、青を基調にした服を着ていた。

「あ…、かりんちゃん…」

「もう、始まつてますわよ」

夏鈴は言いながらみちるの手をとる。

その言葉に『何が?』なんて、みちるは思わなかつた。この娘にまかせておけば大丈夫。なぜかみちるはそう思つた。

「あ、警備員さん」

につ、こつと笑う夏鈴。

警備員さん…こと松本準次（32歳・独身）はその笑顔に天使の微笑を見た。
誰にも漏らしたことはないが、密かに夏鈴のファンだつたりする松本氏であつた。

「おつとめ、『』苦労をまです。夜の見回りなんて大変ですね」「い、いえ。これも自分の仕事なんで…」

夏鈴ちゃんが俺に声を！ 松本氏、幸せの絶頂中。

「あのー、それでお願いがあるんですの」
もじもじと夏鈴。

「の娘、す『』…みちるは感心してしまつ。

素晴らしい演技。僕もこれくらいでなくては…！…！

「この子、今日転校してきたばかりでして、その…。お茶会を開こうと思つて。このこと、内緒にしていていただけませんか？」
「は、はい！」

間もない…とこのせいかつてだらり。すぐ逆事が返ってきてる。

「ありがとうござります…」

先ほど以上の満面の笑みで夏鈴は笑った。

松本氏は「では、」きげんよつと去つてこく夏鈴をしばりく呆然と見送つていた。

松本氏にじきげんよう、と言つて去つてきた夏鈴。みちるの右腕をしつかりとつかんで歩いている。

（うふふふふふふふふ。こんな夜に歩くなんて…。これから呼びに行いつとつっていたのに、手間がはぶけましたわ）

でも…。なぜいるのだろう？ 夏鈴はふと疑問に思い、首を傾げた。

「あの…」

みちるは夏鈴に声をかける。夏鈴は返事をせず、みちるを見つめた。

「その…。ありがとう。」めんね、迷惑かけちやつて」

言葉に夏鈴は、ふとみちるから顔をそらせ、前を見据えた。

その時の夏鈴の表情は…つとつとつとしていた。

（か、可愛いですわ…。それから…）

夏鈴、百面相である。

次はニヤリ、といつた表現があこそうな表情で、笑つた。

（これを弱味にまず、麻生みちるゲット！ ですわ。ふつふつふ。初日からゲットできるなんて、やっぱり神が私にくださったのね…！…）

… 笹本夏鈴、かなりの白口中悪者である。

「あ、お入りになつて」

夏鈴に部屋に入るよつに勧められ… しばらへみちるはためりつた
が、最終的には夏鈴の部屋に入室した。
そしてみちるは言葉を失つ。

「…」

ぬいぐるみ、ぬいぐるみ、ぬいぐるみ…!!

くま、うさぎ、なんでもいじれだ。

(すうじ数…。やつじえばかりおるはぬいぐるみ、集めてなかつたな

…)

呆然としているみちるに「わ、お座りになつて?」と並べつつ夏
鈴はいつの間に用意したのか紅茶も一緒に手渡す。

「あ、びーもありがとー」

みちるは夏鈴から紅茶を受け取る。

ミルクティーだ。一口、口にする。

もとから大きいみちるの瞳が、更に大きく開いた。

「おじしいー こんなに美味しい紅茶飲んだの、ひせしげりだよ」

みちるの反応にくすつと笑う夏鈴。

(やつぱり可愛い? ですわ)

夏鈴も自分で入れた紅茶を飲み、ほつと一息ついて

「ところで、みちるちゃん」

興味津々といった顔でみちるに問いかける。

「なんでこんな遅くに廊下を歩いていますの?」

浴室もトイレも各部屋についているのではつきり言つて夜に部屋
から出る理由がない。

「そ、それは…」

みちるは別に小河氏の部屋に行くことを忘れてはいるわけではない
が…。それを言つてしまつていいのだろうか?

(げ、時間もそろそろやばい)

10時5分前。

ぱりしてしまおつか？ そういう考えがみちるの頭の中によぎる。

(「、ーん…。どうしたものか…）

「？ わざから時計を気にしてくるよりですけど何がありますの

？」

「げつ」

みちるは慌てて口を塞ぐ。

(「、声だしちまつた…）

どーしょー。みちるの顔が青くなる。

「…私に言つてみませんこと？」

え。言つてみるつて言われても…。

10時まで後3分…！

(「 言つてしまえ…！」)

みちるは腹を決めた。言つてしまえば案外さつわと解放してくれるかもしね。

みちるはにやりといつた感じで微笑む。

夏鈴はこの笑顔にドキッとした。

(なにドキドキしてますの？ 相手は女の子ですのにー…）

夏鈴は顔が少し上気する。

「実は…」

この部屋には2人しかいないのだが何となくみちるは夏鈴の耳元でボソボソといつ。

10時まで後2分！

「なんですつてーつつつー…！」

「わ、しーつ、しーつ…！」

(「、小河美千代め…）

みちるの声は耳に届かぬまま、夏鈴は怒りに拳を握つた。

(やつぱり私のかおるさんに手を出そつと考えていていたのですわねつ…！ 許せないつ… ですわつ…！

夏鈴の脳内では、かおるは夏鈴のものになつてゐる。

速急に訂正すべきだ。

：それはさておき。

ぐるりと振り返り、夏鈴はかなり座った田でジロリとみちるを見た。

「夏、鈴…ちゃん？」

恐る恐る、みちるは夏鈴の名を呼んだ。

「そんなお誘い？」

…夏鈴から怒りの炎が見える　なんていうイメージ。みちるはこつそり後退りしてしまつ。

「うけなくて結構つ、ですわっ！－！」

夏鈴のこの時の格好は　両手を腰に当てていた。

…なんという格好だらうか。

（仁王立ち…といふか、何といふか…）

みちるの今の心境ははつきり言つて「ひーっ」だった。

みちるは思い出す。

笛本夏鈴。

笛本憲司郎弁護士の一人娘。

確かみちるの『見合い写真』の中にもいた気がした。みちるは人の顔と名前を覚えるのは得意だ。かなりの自信があるが…。（この娘は見合い写真を見なかつたのかな？　ま、覚えてても困つても困るけど）

ふと、時計を見上げる。

：10時3分。

約束の時間に遅れたこと、夏鈴の様子　から、みちるは今夜こ小河美千代氏の部屋に行くことは諦めた。

今は…

（この娘をどうするか、だよな）

今のところみちるをぐちをこぼす対象としてみていくよしじば

「うは部屋に戻れそうにない。

みちるはペロリと唇をなめた。

そんな姿にも色気を感じる夏鈴。

（私…あ、危ない趣味があるのかしら…）

「と」「うで、みちるちゃん」

（なくつてよ、そんな趣味つ）

夏鈴は自分で自分の思考を吹っ飛ばす。

顔をふるふると左右しながらみちるに提案する。

「あなた、『自分の兄弟を守りたい』とは思わなくつて?」

おーつほつほつほつほつほ。そうこう声が聞こえてきたのである。

田が「私に従いなさい」と囁いているのだ。

みちるは、瞬いた。

瞬きながら、思った。

（…「へん、面白ね…）

みちるはみちるなりに考へた。考へて、出した答えは…。

「うんっ。守りたい」

夏鈴がどのようにかおるを守るか と、『面白ね…』とい

う観点で、彼女に従うことを決めた。

好奇心（？）に負けたみちるであった。

「ならば」

につこり。夏鈴は笑う。

（私の思惑通りですわ。『れでみちるちゃんは私のもの…）

「私の言つことを聞いてくださいますわよね？」

これで1人…。とりまきが増えましたわ？

（）の調子でかおるせんもゲット… ですわ…）

「 クシコツ…！」

かおるは寒気を感じてくしゃみをした。
時計を見る。

「 …遅い…」

かおるはひとり、ぼやいた。

時刻は10:30。

宣言どおり『さつさとかたをつける』ならば いい加減、みち
るが帰つてきてもいいと思うのだが。

「 …寝ようかなー？」

さつきから独り言連発のかおるである。

(寝れば夢を見るかもしねない)

もう一人の自分の声。

「 …やつぱ、待つてよ」

かおるはがばりと起き上がり、一気に立ち上がる。

「部屋の掃除でもするか」

いりしてかおるの夜中の掃除が始まった。

ちゅんちゅんちゅん

何の鳥の声だらう？ 私は…。ああ、砂倉留学園に転校してきたん
だつけ？

かおるの頭はひどくぼーっとして『考へる』といつ活動をなかな
かしない。

(ひとかげ?)

向こうから誰か来る。背が高い。

ココハドコダロウ。

声なき声が問いかける。…かおる自身は気づいていない。
その人は近づいてくる。

日本人にして薄い色の髪。肌は日によく親しあんだのか、小麦色だ。

かおるはその人を知っている。歓喜のあまり声が震え、視界がかすむ。

「…か…り…」

かおるの髪は腰までとどき、その髪を風にもてあそばせながら一気に走る。

「光！」

その人は大きく腕を広げてくれた。…いつものように。声が聞きたい。その笑顔だけでは5感を満喫できない。自分を呼んでほしい。「かおる」と、呼んでほしい。視覚だけでは、足りない。

かおるはもう一度声を振り絞つて叫ぶ。声がつまく出ない。

「光つ」

抱きついた…抱きつけた気がした。

そこでかおるの涙は『歓喜』から『悲しみ』へと、変わる。…自分で分かつた。

風に揺れる花々。

深く、澄んだ川の流れ。

すべて止まつた気がした。…そう、時の流れまでも。

「いかないで」

かおるはその人にそう、叫んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9182u/>

砂倉居学園

2011年11月20日03時22分発行